長井さんへの詫び状です

イタガキノブオ

いいだけお世話になっておきながら、何ひとつお返ししなくて（出来なくて）ごめんなさい。

ガロに入選した当時、僕は北海道の旭川に住んでいました。そろそろ僕も就職活動のことなんかも考えつつ〝文書の書き方〟とかいう本を読んでいたらそこに、「原稿用紙は下書き用や印刷用のものだから、それへ手紙や文書を書いて送るのは失礼です」なぞとあって、ふむそうなのか、知らんかった、と世間知らずの（今でもそう）僕は思っていたところに、長井さん直筆の御手紙が出来ました。つまりガロ入選のお知らせです。

封をあけると、それは原稿用紙に、しかもそのマス目を完全に無視した文字で書かれた豪快な御手紙でした。もちろん嬉しかったのですが、なにしろ僕は前記の状況でしたから、一瞬うーむと考えた後に喜んでしまったのでした。ごめんなさい。

その後、上京して材木屋2階の編集部で初めてお会いしたとき、若くて礼儀知らずだった（今でもそう）僕は、長井さんの御顔を拝見して当の本人に「（長井さんは）色々な人の描かれている似顔絵そのままですね。」なぞと言ってしまったのでした。今思えば本当に恐れ多いことです。長井さんは「そうですか、ほっほっほ」と笑ってらっしゃいましたけれどもね。

その後、ガロに色々と持ち込みをしてみた中で、一回だけ〝ひとコマ漫画〟の作品があって、その時ばかりは「これはダメです、ウチはこういうのは扱ってないから」と言われてしまいました。ところが当時は僕も若くて身の程知らずでした（今でも）から、「これだって漫画なのです」とか何とか、けっこうクソ生意気にも色々言い返したりもしたのです。ごめんなさい。それでも長井さんは原稿をつっ返したりせずに「まあ預っておきましょう」とおっしゃってくれたのでした。それを有難いとも思わずに、ごめんなさい本当に。

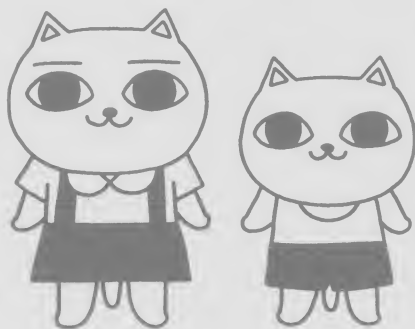
ちょうどその頃でしたか、ガロ出身作家つりたくにこさんが急逝されて、長井さんは僕に「この本あげるから読んであげてよ。つりたさんも喜ぶよ」とばかり、つりたさんの「六の宮姫子」をくださったことがありました。けれど実際はまだガロ慣れしてなかった当時の僕には、つりた漫画の面白さがわからず、その言を聞いた長井さん「つりたさんの面白さがわからないなんて、そんな事があるかい!!」とばかり僕に一喝し、けれど僕は内心「そんなこと言われても」とばかりブツブツ呟いていたのです。ごめんなさい。今はだいぶ理解しています。

そしてたった一度だけですが、恐れ多くも長井さん御本人に、浅草橋駅まで原稿を取りに出向いていただくという事になって、その待ち合わせ場所の電話確認のとき、長井さん「秋葉原側のホームですか、千葉側のホームですか」と言われ、ところがとてつもない方向音痴だった僕は（今でもそう。たぶん一生直らない）どちらが秋葉原側で、どちらが千葉側であるのか、しばらくの間考えざるを得ず、またしても「そんな事もわからないの!!」とばかり怒られてしまい、いやもう本当にごめんなさい。

ごめんなさいばっかしですが全部本当のことなのでしかたありません。どうか天国でも笑って許してくださいね。長井さん。

一度だけしかお会い出来なくて残念です

ねこぢる

長井さんには私がまだマンガを描いてない十代のころ、山野の「四丁目の夕日」の原稿を届けに行った時に一度だけお会いしました。季節は寒かったころだと思います。「大変だったね、ごくろうさま」とニコニコしながらジュースやお菓子をたくさん出してくれました。まるで幼児をあつかうように。ねこぢるになってからは、失礼な話ですが一度も青林堂を訪ねる事がなかったのでお会いする事が出来なく残念に思います。御冥福をお祈りします。

御冥福をお祈りします

山野一

初めて長井さんの元を訪れたのはもう12年も前のことになる。材木屋の二階、一番奥の窓ぎわに座っておられた社長はとても小柄で痩せていた。おそらく体重40キロ未満、贅肉や脂肪は一切なく、生きるために必要な最小限のものしか備えていない…、まるで仙人のような人だなと思った。目がとても澄んでいて、こちらの貧弱な脳みそを後頭部まで見透かされているようだった。とてもまともに視線を合わせている事ができない。私が初めて描いた原稿に一枚一枚目を通し、「うーんこれはダメだな、でもまた描いて持っておいでよ。」とおっしゃった。とても静かで優しい声だった。それから私は毎月シコシコ漫画を描いて、材木屋の二階に持って行くようになった。

私は対人関係に難があり、なかなか人並みに会社勤めなどすることができない。今こうしてどうにか生きていられるのもあの頃長井さんと出会えたおかげです。どうかやすらかにおやすみ下さい。合掌。

入選作品「ハピネスインビニール」（ガロ83年12月号より）

遠くから見て

黒川 創

　はじめて長井さんを見かけたのは、十数年前、京都の徳正寺だったのではないかと思います。先日長井さんの密葬でお経をあげた、井上迅君の実家のお寺です。長井さんは、迅君の両親と親しく、そのころときどき徳正寺に遊びにみえていたのです。迅君は当時まだ小学生で、大学生だった私は、彼の（名目だけの）家庭教師をしていたのでした。

　以来十数年間、いろんな集まりやパーティで、姿を見かけましたが、私は一度も、長井さんと話をしたことがありません。ただ、「あ、長井さんがいるな」と、離れた場所から見ているだけなのでした。

　そういう会場で姿を見ても、長井さんの声は、ほとんど聞こえてこない。だが、なんとなく、「あ、いる」という静かな存在感だけはあって、私は、その周囲をぐるぐるまわるだけで過ごしてしまったようなのです。何を話したらいいかわからない、というのが、正直なところでした。話せずに終ったのが残念、というのでもありません。むしろ、私は、あの静かな磁場のような長井さんの姿を、何度か目にできて、よかったと感じています。

　最近、『〈外地〉の日本語文学選』というシリーズの編者をしています。現地人作家、日本人作家の双方を含め、戦時中、日本が支配していた旧植民地で書かれた日本語の文学を、アンソロジーにしておこうというものです。戦後の「日本文学」史からはほとんど消去されている、それらの領域でのすぐれた文学を、まだ存命中の当事者が残っているあいだに、誰もが読める状態にしておきたいということが、これに着手する動機の一つとしてありました。一月六日、長井さんの訃報に接したのは、この第二巻「満州・内蒙古／樺太」篇の、大詰めの作業のさなかでした。

　正直なところ、いざこの作業にとりかかるまで、「満州」と言っても、奉天（瀋陽）、ハルビン、新京（長春）といった都市が、それぞれどこにあるのかさえ、私にはおぼつかない状態でした。だから、かつて新京に行っていた長井さんが、敗戦直前に自分の意志で日本に戻ることに決め、実際に戻ってきたというエピソードも、以前は、私にとってはかなり抽象的な話でした。それが、編者としての作業のなかで、少しずつ、具体的なイメージをともなうものになってきました。つまり、当時の満州から自分の意志ひとつで引きあげるというエピソードが、いかに驚くべきことであり、また、それが長井勝一をどのような種類の人間として示すのかも、ようやく実感として形をとってきたのです。こんな日本人もいたのだな、と。

　この満州経験のようなものが、『ガロ』にいたるまで、長井勝一という人の個人史のなかで一筋につながっていることに、私は感銘を覚えます。

　長井さんには、長井さんなりに、『ガロ』へとたどりつく理由が、あったでしょう。また、カウンターカルチャーのなかから生まれた若い漫画家たちには、彼らなりに、『ガロ』に作品を寄せる理由が、あったでしょう。後者の足並みに、長井さんが足並みを揃えるのではなく、たまたま『ガロ』という四つ辻で両者がぶつかったような趣きが、この雑誌の強さを支えたと思う。そして、その趣きを、しつこく持続させてきたところに、戦後民主主義とともに終らない、長井流のタフなアナキズムのようなものを感じます。

　長井さんと、カウンターカルチャーの世代とのあいだには、高度経済成長という時代の峠がありました。その「高度成長」から生まれてきた芽のおもしろさを、長井さんは見落とさなかった。しかも、それを擁護しつつ、長井さん自身は、「高度成長」とは違う道筋を歩きつづけた。

　遠くからみて、長井勝一は、スケールの大きな人だった。

去年の夏の長井さん。

松沢呉一

雑誌の元編集長や出版社の元社長が亡くなったからといって、追悼特集を普通はやるまい。やったとしたって誰も読むまい。それを二度までも成立させてしまうのが長井勝一という人物だ。

私は知人からの電話で長井さんの死を知った。死を報ずる新聞記事を見てその事実を確認し、もちろん悲しみや驚きはあったが、その時点では亡くなってから既に数日が流れていて、時間的なズレによって驚きや悲しみやが表に出ないままに置き去りにされたような印象があった。どこか驚き切れず、どこか悲しみ切れなかったのだ。

しかし、さらに数日の時が流れ、ようやっとその意味が実感できるようになり、その実感は日が経てば経つほど強まってきている。

長井さんと最初に会ったのは今から20年前のことになる。その頃に生まれたのが今のガロの主たる読者であろうことを思うと、何やら感慨深いものもある。

高校3年のクリスマスの日、大学受験の下見と親にウソをついて、友人と深夜バスで東京にやってきた。その友人もまたガロの愛読者で、二人で青林堂に向かった。本当に材木屋の2階にあることに感激しながら、階段を上がったら、そこに長井さんや南伸坊さんがいて、さらに感激した。

その日は土曜日で、すぐに南さんはいなくなり、長井さんも、これから出版関係の会合があって出掛けなければならないと言いながら、しばらく我々の相手をしてくれた。

両手一杯のガロのバックナンバーや単行本を売ってもらい、ついでに古本屋街を覗き、帰りの新幹線の中で、それら「大学受験の下見」の成果を眺めては喜び、またガロの誌面でよく知っていた長井さんと話ができたことを友人と高揚した気分で幾度も語り合ったものだ。

長井さんは「東京の大学に入ったら、また遊びに来なさい」と言ってくれたが、それから何年もの間、私は遠くからガロを眺める一読者であり続けた。

私がガロに原稿を書き始めたのは、長井さんが社長から退いたあとのことだから、結局、編集部で長井さんを見かけたのは、その時が最初で最後となった。

パーティの席で言葉を交わすような接触を除けば、長井さんと長時間話すことができたのは、それからずっと後、まだまだ記憶が鮮明な昨年のことだ。

以前から一度長井さんの話をじっくり聞いてみたいとの思いがあり、長らくやっていたインタビュー連載で長井さんに登場してもらおうとも考えていたが、結局その雑誌が廃刊になってしまって実現せず、別冊宝島「性メディアの50年」で戦後間もなくカストリ雑誌にからめて特価本の話を書くこととなり、長井さんにインタビューをすることとなった。出た当初に『ガロ編集長』（筑摩書房）で読んでいたはずなのに、別冊宝島の編集者に言われるまですっかり忘れていたが、長井さんは青林堂の前にカストリ誌を主として扱う特価本屋をやっていた。

8月30日、阿佐ケ谷のお宅におじゃました。

電話では「最近は寝てばかりいて」と、嗄れ声がいよいよ嗄れて弱々しく、この日もずっと寝ていたとのことだったが、見たところは元気そうで、ホッと一安心。

長井さんは「もう昔のことは忘れてしまって」と言って、香田さんに補足して

もらいながら、あるいは資料を取り出しながら、戦後の闇市から、青林堂に至るまでの話をしてくれた。

あとで調べ直してみたら、話してもらった内容の7割方は『ガロ編集長』に出ている話ではあったが、その内容というよりも、長井さんにじっくり話が聞けたことが嬉しかった（「別冊宝島」はカストリ雑誌の話が中心だったために、この時のインタビューは十分に生かせず、ミニコミ「ショートカット」別冊「ショートカット松沢呉一」第9号に長井さんのインタビューを中心にした原稿を掲載した）。

インタビューのあとの雑談で、長井さんは私に「今君が集めているような本（戦前から戦後のエロ関係）はいずれ物になるから、このまま集めるといい。いいことをやっているよ」とのアドバイスをしてくれた。

青林堂にとっては、すぐに忘れてしまうような、よくある日常の些事でしかなく、どちらかと言えば、仕事の邪魔になりかねない鬱陶しい日常のひとつでしかないんだろうが、高校の時に青林堂に行ったことが私にとって重大な出来事のひとつになっているように、長井さんの言葉はきっとこれから先もずっと私の中に生きることになるんだと思う。

そんなことがありながらも、というよりも、そんな会話を交わせたことに、どこか安心した気持ちもあって長井さんの死をさほど動揺なく受けとめられたようなところもある。いずれ長井さんの話をじっくりと聞いてみたいとの思いが実現しないままに終わっていたなら、もっともっと悔しさが滲んできていたはずだ。

長井さんの体が弱いことは長井さんの存在を知った頃からの既成事実、また、とりわけここ数年体調が思わしくないこともわかってはいたが、新しい体制が出来て、仮に長井さんが亡くなっても、ガロは続くとの安心感もあった。

ところが、日にちが経つほどに長井さんのことを考え、僅かな接点を思い出すことが増えてしまい、どうもそれほど簡単なことではないんじゃないかとの気持ちが強くなってきている。偉そうなことを言えるほど、長井さんとの交流があったわけではないのだが、そんな私でさえ、その存在感を認めないではいられない。

数年前に、ガロが危ないと聞いた時、なんとしても存続してもらわないと困るとの危機感を抱いて、一読者の立場から私なりに尽力もした。長井さんのためにこそ、その遺志を引き継いでガロを盛り立てていかなければならないというのは正しいのだけれど、もしガロが今なくなってしまったとしても、もう長井さんがいないのだから、それはそれで仕方がないことと受け入れられるような気がする。

こんなことを言うと、編集部に怒られてしまうのかもしれないが、長井さんがいなくなってしまったガロは既にガロではないような気さえしている。これまで全然意識はしていなかったのだが、亡くなってようやくそのことに気づかされた。

既に業務に携わっていたわけではないものの、本号まではやっぱり長井さんが作ってきたものだったんだと思う。

撮影：松沢呉一

空飛ぶ長井さん

みぎわパン

ある夏の夕方、長井さんと4人の女のこが歩いてました。女のこの内お二人は漫画学校の生徒さん。それから香田さん。それと私。今から皆さんで天ぷらを食べに行くところです。しばらく歩いていくと電柱のポスターに目が止まりました。

『真理の光の中へ飛翔しましょう』と書かれてます。漫画学校の生徒さんが指差し

「こんなのごりやくあるのかなあ⁇」

と言いました。ごりやく…。この言葉に久久に私はぐっときて

(ごりやくじゃなくって心の平安ね、心の平安。だって、この世は私の宇宙なのに、その自分の世界に自分が飼い慣らされたりへいこらコキ使われていたとしたらへんじゃない。解脱するのよ)

と心の中で思っていました。が、くちでは

「ごりやくなんてあるわけないよー」

と言ってみました。長井さんに対するナニが言わせた、という訳です。

「てえこも大人になってきたなあ」

長井さんは、私のことをてえことかぱんことか呼び捨てになさいます。

さて、これよりも更に昔のことになります。ガロに入選して間もない私は男と別れて腐っていました。

「芸術やる男ってのは大抵が我儘モンだ。てえこもこれで漫画家になったんだから、もう引っ掛かるなよ。もう男はやめとけ」

長井さんは日本酒をちびちびやりながらおっしゃいます。

「それより俺がびっくりしたのはさ、てえこが公団住宅の代行申し込みに引っ掛かったとき、アレびっくりしたなあ。あんなもんで当たるつもりで嬉嬉としてんだもんなあ。このひと大丈夫か、まいったねーって」

私は大変恥ずかしかった……。宝くじ買うのと同じや、と言おうとも思いましたがやっぱ違うのでゆうのをやめました。長井さんはお酒をかなり過ごされて

「てえこもな、もう男やめい」

と、10分置きぐらいに何べんも何べんもおっしゃいました。そしてそんなに酔っ払っているのに、いきなりフォローのお言葉を言われました。

「でもなあ俺、そおやっててえこがいちいち騙されて引っ掛かってみるっての、イイと思うんだ。好奇心が強いんだ。猫と同じだ」

勿論、心底からのフォローではないのです。

次の日、友人のかこちんにこの話をすると

「えーっ、その程度の事でそんなこと言ってくれるの？ ほんならアンタ、これまでの悪行全部長井社長にバラしりんね。あと百回は誉めてもらいりん！」(三河弁)

悪行というのは恥部のことなの。高校時代から当時まで計8回統一教会の集会に参加していること。念力で世界を平和にしようとしたこと。ダイエットをしてること。当時の現在、ものみの塔に夢中で王国会館にも是非行ってみたいこと(行った。面白かった)。当時の先日、統一教会絡みの印鑑を19万円で購入してること。箱庭でイヤシロチを作ったこと。ヒランヤを買ったこと。悪行といえど脳ミソの構造が凡庸だからこうゆうことになったのだ。かこちんはどうも、私が美術モデルをする事やガロに漫画をかく事も、この騙されシリーズの一貫だと捉えておるようだったのだ。モデルについては「ソレは違う」と言えるけど、ガロに関しては「そおともいえる」というかんじだ。

では'89年の夏の夕方の会話に戻ります。

「こんなのごりやくあるのかなあ⁇」

「ごりやくなんてあるわけないよー」

「てえこも大人になってきたなあ」

「ヨガやったり、へんな音楽聴かせたり…するんですよね…？」

「で、住所と電話番号書かされて～」

「そおやって寄ってきた知恵後●の子供集めてはイカレタことやってんだ」

ち、知恵後●⁉ だって長井さん、私、オウムとガロってチョット似てるなって今思ってたとこなのにィ。なら私ら描き手は知恵後●だ。さしずめ編集は障害者施設の優しい職員さんってとこですか。お世話をかけます。

「長井社長、違います。きれえな女のこがビラ配ってるらしいそうです。頭イイ人そうらしいそうです…え～っと、モゴモゴ…」

「知恵後●だよお。ブツゾーの前でひゃ～ってって踊ってな～、アハハ」

このひゃ～かひぇ～の声のとき、長井さんは踊りの素振りをなさいました。うわ、今のは長井さん、近年稀にみるアクションだったのでは？ まだお酒飲んでいないのに、お調子に乗られ今にも踊り出しそうでした。

それとも私が知らないだけ？ ねえ、施設の優しい編集員さん、長井さんはホントはふだん、踊ったりもするのですか。まさか、宙に浮いたりは……しませんよねぇ。

――追悼集会の前に書いているのでまださようならは言いません――

長井さん、お疲れさまでした。心より御冥福をおいのりします。

大越孝太郎

　長井さんと自分が向かい合って話した時間は合計で一時間くらいだと思う。漫画を初めた頃に直接作品をみて頂いたとき、いくつかのアドバイスと雑談のような話しをしてくれた。以前にも何かの機会に書いたと思うけど、他社の編集者は新人の持ち込み原稿をみるのが本当に乱雑だ。勿論忙しいのはわかる、でももう少し作家の身になれないものかと嫌な思いをした事もあった。でも長井さんだけが違った。一枚の原稿をゆっくりとつぶさに、みてくれるんだ。全部みおわると丁寧に重ねて机の上でトントンとそろえる。自分は四回くらいトントンってやってもらった。そういえば長井さんに会いたくて、用事もないのに青林堂へ行ったこともある。長井さんの、不思議に人を引きつける話しと話し方がききたくて行った。それから青林堂の新年会とかイベントにもできるだけ出席して、長井さんの姿をみるようにしていた。でもそういうときは人気者の長井さんのまわりにはビックな人が入れ替りに話しかけていて自分はなかなか近寄れなかった。

　そしておととしの夏、ガロ30周年パーティーの席で同年代のマンガ家といっしょに長井さんを囲んでふたことくらい話したのが最後だった。

　自分は今、思うところあって雑誌編集の仕事をしている。長井さんと同じ〝編集者〟だ。勿論その器量ははるかに及ぶものではないけど、雑誌づくりに対する編集者としての気持が少しずつわかってきたような気がするんだ。漫画家という人間は自分も含めて、傲慢でワガママで自分勝手でズルい。特にガロの漫画家は

『ノーギャラだしな。』

という本音があるからことさらだろう。

　長井さんはそんな作家達を人知れない努力と気遣いでガロに引き寄せてきたんだろうな。すごい本当にすごいよ。並々ならぬ苦労だったろうな。長井さんが亡くなられたことで自分は今一度、編集者の在り方と、漫画家としての責任について考えなおさねばと痛感する。

　長井さん本当にありがとう。

　おつかれさまでした。

けものみちの長井さん

津山週三

私の描いた漫画が単行本として青林堂から出版されたのが八十六年だから、今年でちょうど十年だったことになる。出版された直後、私はお礼のつもりで青林堂を訪ねた。私が長井さんにお会いしたのはその時が初めてであった。もっともその後は一度もなかったので、結局その時の一回きりということになる。

時間にしてほんの三十分あまりのことであった。今後ともよろしくという挨拶程度のもので、あまりあれこれ話をしたわけではない。したがって私は青林堂関係者の中ではもっともなじみの薄い、いわばほんの顔見知り程度の存在であると言うべきかもしれない。しかしそれでも漫画を通してはじめてガロに関わりをもった私にとっては、やはりその時お会いした長井さんご自身、まさしくガロそのもののお顔であった。

この人があの長井さんか…という思いであった。大変小柄で、目が落ちくぼみ、失礼な言い方だが、まるでいわしの干物か何かのようであった。

長井さんとはそんなわけで個人的にはほとんどといっていいくらいつながりがない。全く知らないといったほうがいいかもしれない。しかしそんな私が今、これまでまるでいかにも親しくお会いしていたかのように語ることができるのは、やはりガロそのもののイメージと長井さんのイメージが私の中で勝手に結びついてしまっているからであろう。

私がはじめてガロに投稿したときのことである。送ったその作品が実際にガロに掲載されたのは送ってから三ヵ月後だったが、自分としては採用されなかったものと半ばあきらめていただけに、ある日突然送ってきたガロに私の漫画が掲載されていたのを見たときは大変驚いた。そしてその後は立て続けに掲載していただいたわけだが、その間、何の連絡があったわけでもない。こちらからただただ一方的に送りつけ、その都度掲載してくれるというだけの関係であった。わたしはひたすら無言のまま送り続け、ガロもただ無言のままそれを確実に掲載し続けてくれた。いいとも悪いとも何も言ってくれないままにである。今にして思うといくら一般的な商業雑誌ではないとはいえ、あまりにも無愛想な応答ではないか。

その後次第に漫画を描かなくなり何年かが過ぎた。しかしその間も一度として「また描いてくれ」などと言われたことはないし「その後どうしたのか」などと声をかけてくれるわけでもなかった。お世辞でもそう言ってくれるとその気になるのだろうが、まったくそのような気配すらないのである。あまりにも無愛想ではないか。まがりなりにも単行本を一冊は出したほどのつながりなのだ。少しは優しい言葉をかけてくれたっていいではないか。もちろんこれは長井さんがというより、編集部がそうしているだけのことなのだろうが、しかし私にとってはそのようなガロの在り方そのものがどうしてもそのまま長井さんのイメージに結びついてしまうのである。要するに長井さんは、私にとっての大きな受け皿であったような気がするのである。

ガロに掲載されたいろんな人の作品を見ていると、いろんな場面に長井さんがよく登場してくる。それは長井さんが登場人物として非常によく絵になる風貌をもっていたからということもあるであろうが、それよりも、作者の人たちが長井さんを、ただそこにいるというだけで、それなりの絵柄になってしまう人であると感じるからであろう。つまり長井さんの人柄につい魅かれてしまうからであろう。事実どういうわけか、たとえセリフがなくとも場面として成り立ってしまうから不思議である。私自身そのように感じ

た一人である。

長井さんは私が漫画を描くに際しての特異な場所であってくれた。誰が建てたかしれない田舎のバス停のような存在であった。きっと近くの人が置いたものであろう古ぼけた椅子などがあったりする。ガロは、そして長井さんは私にとってまさしくそのような存在であった。

青林堂ーガローー長井会長というこの三位一体は、もはや出版社というより宗教団体である。教団としての青林堂があり、教典としてのガロがあり、そして教祖としての長井さんがいた。長井さんの不思議な魅力は教祖としての魅力であったのだ。

あるいは長井さんのガロは山の中の一本のけものみちのようなものであるといっていいだろうか。長井さんは本道とは別の、ある種の人たちのための専用の道を切り開いたのだ。そのけものみちを歩く人々の中には、夢を抱いた人々もいたであろうし、夢を失った人々も多くいたであろう。いずれ華々しく本道に戻ってメジャーになっていった人もいたであろうし、どこかで野たれ死んだ人もいたであろう。輝かしくもあり、恐ろしくもある、そのまま深みにはまりけものみちを長井さんは切り開いたのである。

創刊当初からみるとガロは形も内容も大きくかわってきた。これからのガロがどのように歩んでゆくかは私には想像もつかない。ただどのように変わっていこうと、長井さんがガロの生みの親であり、先駆者であり、教祖であることだけは決して忘れてはならないと思う。

私には十七才になる長男がいる。これが最近自分の部屋で夜おそくまで漫画を描いている。時々見せてもらうのだが、絵はうまいかへたかといえば残念ながらへたな方に属する。しかし絵の描きかたがあきらかにつげ義春さん風なので、聞いてみるとやはりつげさんのファンだという。部屋にはつげさんの全集まであるという凝りようである。長井さんの訃報を聞いた今、このことを考えるにつけ感慨無量になる。長井さんの切り開いたけものみちを、何と、今私の子供が歩こうとして頑張っているのだ。この道を歩む者は着実に後に続いているのである。

私は長井さんとはわずか三十分あまりしかお会いしなかった。残念といえば残念だが、しかしたとえ一度でもお会いすることができたということだけで私としては充分である。長井さんや、長井さんのガロに関わった自分を誇りに思っている。心から誇りに思っている。ご冥福をお祈りします。

漫画の持つ〝やさしさ〟を教えてくれた人

赤坂竜也

かれこれ十年以上前、「漫画家になりたい」という思いを胸に京都の某大学を中退して上京した僕は、〝可能性への挑戦〟という名の殺伐とした精神に支配されていた。学歴を棄てることと親の期待を裏切ること…自分の実力のみで未来を切り拓いていくことに賭けるという一見かっこいい行為の裏には、幾多のプレッシャーと不安が渦を巻き、僕の言動のすべてにその影を落としていたはずだ。

　だから当然、それは僕の描く漫画にも大きく影響を及ぼした。頭でっかちでアオくさくて、そして何よりも攻撃的なものばかり描いていた。殺伐とした力みに加えて、とことん浅はかだった僕なりの、憧れの『ガロ』への、それがアプローチの仕方でもあった。

　曰く「フツウの漫画じゃいけない」「思わせぶりでなくちゃいけない」「読み手に媚びちゃいけない」…「アタマ良さそうでなくちゃいけない（！）」…とんだ大バカヤロウだが、当時の僕はマジでそう思ってたんだから仕方がない。そんなだから、憧れであると同時に大きな壁でもあった『ガロ』の編集長である、〝神様〟長井さんに教えを乞える機会に巡り合った時にも、僕は喜びの興奮と共に言いようのない緊張感を強いられたのだ。「フヤけたこと言ってるとバカにされるぞ」みたいな。

　ところがどうだろう。当時広尾にあった某漫画講座で直に接した〝神様〟ときたら…小柄で温和で、まさに〝好々爺〟を絵に描いたような、緊張感を強いるどころか逆に体の力が抜けていってしまうような暖かなオーラを身にまとった人物だったのだ。拍子抜けした僕はしかし、そこでまた思い直した。「外見に騙されちゃいけない。きっとその独自の漫画哲学に則った指導は、泣く子も黙る厳しいものに違いない…」

　これもまた大ハズレ。長井さんは言った。

「漫画なんて人に教わるもんじゃないんだよね。ここではみんな、いっしょに頑張っていける仲間をつくってよ」

　今にして思えば、この言葉の中に長井さんの持つ厳しさとやさしさの両方ともが存在していたのだ。漫画は人に教えてもらって何とかなるなんて甘いものでは絶対にないという厳しさ。でもそれほどに厳しいものだからこそ、お互いに励ましあってより長く地道に頑張っていって欲しいと願うやさしさ。この両方ともが長井さんという人だった。そして特にその〝やさしさ〟が骨身にしみた。

　漫画を志すことが厳しいなどというのはそれなりにわかっていたつもりだ。前述した通り、当時の僕はのっぴきならない緊張と厳しさを糧に生きて、漫画を描いていたわけだから。でも同時にそれは、いつ弾けるとも知れない危うさをも孕んでいたはずだ。そしてそれは、その時机を並べていた現ガロ編集部の白取も同じだったと僕は思う。彼もやはり相当危うかった。そんな僕ら二人を見かねたのだろう。長井さんは青林堂でのアルバイトの誘いをかけてくれた。

　僕らが真面目に教室に出ていたこともあったのだろうが、その誘いの真意を今の僕ならこう断言できる。

「漫画の持つやさしさを知ってほしい」

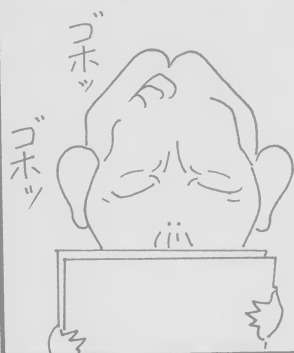
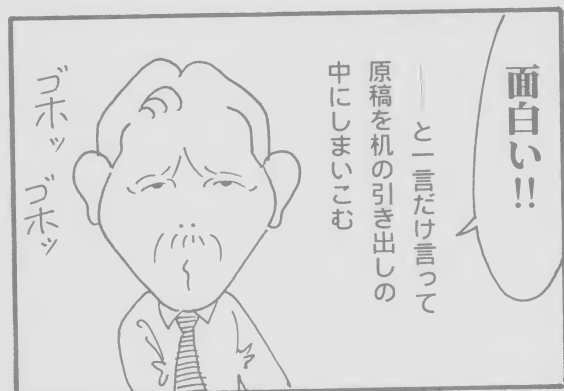
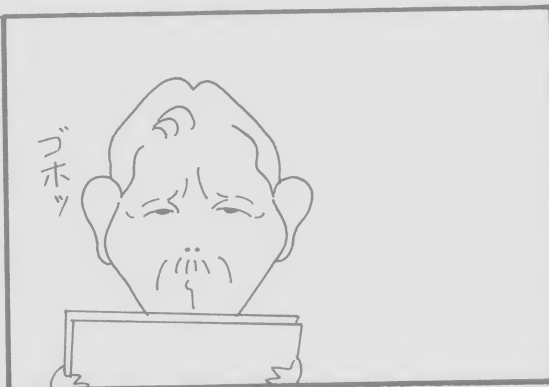
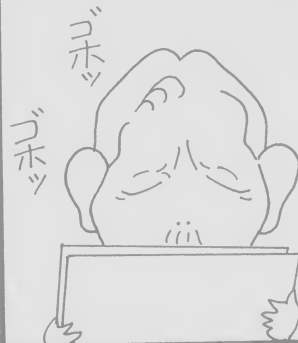
　自分をギリギリの所まで追い詰める努力だけじゃ、いい漫画は絶対に描けない。やがて息切れし、漫画の持つ〝厳しさ〟のみに打ちのめされて無惨にもドロップアウトしていってしまうであろうことが、長井さんの目には見えすぎるほど見えていたのだろう。

　運悪く、僕はその時その誘いに応じることができず、白取が青林堂に入って現在に至っているわけだが、無意識のうちに長井さんのその真意は僕の中にしっかりと注入されたはずだと信じている。白取もそうだろう。二人とも結果的には漫画家にはなれなかった。才能不足ゆえか、努力不足ゆえか、今となってはどうにも判断しようがないし、またどうでもいいことだと思っている。どんな形にしろ漫画に関わって生きている、それだけで充分に幸福を感じている今日この頃なのだ。

　そしてそれは長井さんに出会わなければ決して有り得なかった。漫画の持つ〝やさしさ〟を知らなければ、とっくに全く別の世界で生きる糧を見つけていても何の不思議もなかったはずだ。

　漫画は厳しい。漫画は楽しい。漫画はやさしい。そのすべてを教えてくれた長井さん、どうぞゆっくりと休んでください。

【竹書房女性コミック誌部門編集長】

追悼●長井さんを偲ぶ　長戸雅之

長井さんのご冥福をお祈りいたします……長戸

思い出の喫茶店

杉作J太郎

平凡パンチという週刊誌の編集部に居候していた頃のことです。

「今日、ナガイさんが来るよ」

と××さんが言うので、

「えっ？　ナガイさんって？」

と問い返したのですが、まさか長井さんだとは思いませんでした。

で、聞いてみれば、長井さんの写真を地下のスタジオで荒木経惟さんが撮るんだということでした。

当時、平凡パンチでは、センターグラビアのちょうど真ん中のとこ。ホッチキスの針が出てるページです。

そこで荒木さんが毎週毎週各界の著名人を写真に撮っていたのでした。

「Jちゃん、長井さんに挨拶してきたら？」

最初から長井さんと荒木さんがそこにいらっしゃったのか？

それともみんなで一緒に移動したのかは忘れましたが、編集部のすぐ近くの喫茶店にみんなで座ってました。みんなでとは言っても何人、誰がいたのかというのは覚えてないんですが。

で、具体的に何の話をみんなでしたのかも覚えてないのです。

ただ、覚えてるのは、荒木さんがものすごく嬉しそうだったこと。

ふだんでも荒木さんは嬉しそうな感じですが、なんかその時は、その嬉しそうな感じが特別だったのです。

ふだんでも荒木さんはよく喋るほうだと思うんですが、ふだんいじょうに楽しそうに喋ってました。

そして長井さんはニコニコ笑ってその話を聞いておられた。

静かにニコニコ笑っておられた。

内容は覚えてませんが、忘れられないです。

そして昼下がり。確か天気のいい日だった。

大きな窓からは太陽の光が差し込んできていた。

その後、地下のスタジオで撮影をした。

見本誌が刷り上がってくると、編集部でその写真はたちまち評判になったのです。

「Jちゃん、長井さんって素敵じゃない！」

「シブイよな！」

「長井さんってカッコイイ人なんだ！」

「すっごくダンディだよ！」

詳しく記憶しているわけではないですが、編集部じゅうからそんな声が起きました。

すごく嬉しかったのを覚えています。

今、平凡パンチはもうありません。

廃刊したのです。

そしてその思い出の喫茶店も、もうないのです。

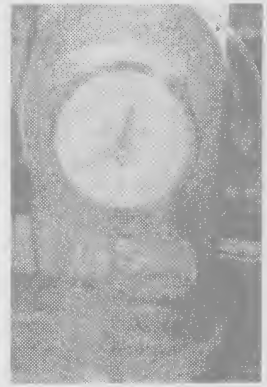
青林堂のポスターと長井さんの思い出

久住卓也

まだ僕が神田にある「美学校」という学校の生徒だった頃に、青林堂の新刊本のポスターをシルクスクリーンで作っていたことがある。毎回だいたい2~3色刷りで、書店にはるためのタテ長のポスターで、150枚ぐらいを一人で手刷りで作っていた。僕は美学校でシルクスクリーンを習っていて、ちょうどその頃に「泉昌之」としてデビューしていた兄に「かっこいいスキヤキ」の宣伝用の小さなポスターをたのまれてそこで作ったのがそもそものきっかけだったと思う。僕は毎日美学校にかよっていたが、自分の作品などろくに作らず、そんなようなことばかりやって面白がっているとんでもない生徒だったのだ。でも泉昌之をはじめ、蛭子能収さん、鈴木翁二さん、丸尾末広さん、篠原勝之さん、谷岡ヤスジさんなど次々と青林堂から面白い単行本が出され、そのたびにそれらのマンガのシルクスクリーンのポスターを作れるのは、やはりとても楽しかったし、それはそれでいい勉強でもあったと思う。

で、ポスターが出来上がると、それをかかえて同じ神保町にある青林堂に歩いて持っていき、部屋のスミっこの方で編集の手塚さんに渡すのだった。手塚さんはとてもていねいにそれを受けとると、いつも缶コーヒーを買ってきてくれて、僕はそれを緊張しながら飲んで、タバコを2本ぐらい吸ってまた美学校に戻るのだった。

ある時、いつものように出来上がったポスターをかかえて青林堂に行くと手塚さんをはじめ他のスタッフもほとんど倉庫に行ってていなくて長井さんに直接ポスターを渡したことがあった。僕はその時はじめて長井さんとじかに話をした。長井さんは「いつもごくろうさん」という感じでポスターをやはりていねいに受けとられた。僕は作品の持ち込みできたのではないし、その時編集部にあまり人もいなかったので少しは気楽だったと思うが、やはりかなり緊張した。長井さんはガロに描いているいろいろなマンガ家の話をして下さった。夏の暑い日で長井さんのうしろの窓から西日がつよく差し込んでて、なんだかボーッとそれらの話を聞いてた。僕はシルクスクリーンの話をしたような気がする。そしたら南伸坊さんの「モンガイカンの美術館」という本をすすめてくれた。(ちょうど情報センター出版から出たとこだった。)そして帰りに根本敬さんの単行本を一冊くれた。

青林堂から出てから、僕はまっすぐ本屋さんに行って「モンガイカンの美術館」を買い、それから美学校に行ってすぐに読んだ。根本さんの本も南さんの本もどちらもメチャクチャに面白かった。

近々お会いすることになっていた 長井さんへの手紙

沼田元氣

長井さんお元氣ですか,ぼくも元氣です。そちらはいかゞですか。そろ〳〵落ち着かれましたでしょうか。

僕はついぞ、この世では長井さんにお会いすることができませんでしたけれど、僕の夢ン中には度々やってこられました。僕は今でもその時のことをハッキリと憶えています。

長井さんは、千葉の海の見える、小高い丘の、古い平屋の一軒家の縁側に座って、こんな風におっしゃったのでした。

「貧乏するってことは、恥ずかしいことじゃあない。悪いことをしてないって証拠みたいなもんだから。」と。僕の顔をまじ〳〵とのぞき込んでおっしゃいました。僕は、別段貧乏を恥ずかしいなんて思っていないのに、そんなことをいうので、こまっていると、「恥ずかしいというのは、文化度の高さなンだよネ」とおっしゃる。そおして、「作家というものは棒高飛びで、その高さを越えなければいけませんね。」と無茶苦茶なことを云うのです。その瞬間僕は急に顔を赤らめ、なんともいたゝまれない様な氣持ちになりました。あゝつまりは、まだ越えていないのだナと、悟ったのでした。

遠くの方で、海がキラ〳〵静かに輝いておりました。そのおだやかな水の上を、糸にでも引かれる様に、小さなボートがスーッとすべる如く進んでゆきます。ボートには、僕と長井さんが、向い合って乗っておりました。

釣りにでも行った帰りの様でした。二人はずっと長い間,押し黙っておりましたが、長井さんが突然ポツリとこんなことを聞かれるのでした。「ゲンキくんは、オナラの原理を知っていますか。」と。僕は、意表をつかれた質問に、何て答えていいのか解らずモジ〳〵していると、どこからともなく旧式の暗箱カメラを取り出して、〝バシャッ〟とシャッターを切ったのでした。そおして「これは〝質問カメラ〟というものです。貴方もガロで、こういうのをやらなくちゃいけません。」とおっしゃいました。続けて「ワタシならこう答えるね ── 奈良の大仏は屁を放って,おかしくもない一人者だ。とね。」すると、そのカメラの底から、ポラロイドの様なプリントが、ヴューと出てまいりました。その出方が何とも生き物の様で、嬉しそうに、感情をもって出てきたのを憶えています。

「質問の答えには、正しい、まちがっているというのはありません。たゞ、色気があるか、気がきいているかどうかだけです。ガロは実験の場なんだから、ジャン〳〵そんなことをやってほしい」とかなんとか、そんな風なことを、マジメな顔でおっしゃっていました。そうか長井さんは、オナラに対しても真剣勝負なんだと、思わず心を打たれ、「成程、〳〵。」とうなずいてしまったのでした。

僕の場合、今迄〝夢ン中に出てきた人は、必ずといってもいい程、一年、もしくは数年内に会うことになっていて、今迄も、A・ウォホール、パウロ・コエーリョ、ティム・バートン、ジョン・ウォーターズ、ピエールとジル、杉浦茂氏、岡本太郎氏、等々、数えたら切りのない程、必ずや、夢見があって、しばらくしてバッタリ会い、言葉を交わすことになるのです。しかも、いきなり会ったりするにもかゝわらず、あまりビックリしない ── なぜなら、夢ン中ですでに会話をしているから。ところが長井さんだけは会わなかった。ついぞ、言葉も交わさなかった。ということは、ひょっとして、長井さんは、本当はどこかで生きておられるのか、それとも、僕があちら側の世界へ近々行くことになるのかも知れないと思ったのでした。

人との出会いは、必ずやどこか、願望というものをはらんでいる。それは自分のヴィジョンだったり希望だったり、それらを自分の一部として取り込み、その出会いによって何かゞ変化してゆくことになるのです。ひいては世の中がそんなことで変わってゆく。

人は願望によって生きてい、生かされているといってもイイ。なぜなら、望んでいると必ずや実現してしまうということに、そろ〳〵皆気づき始めているからだ。作家個人も、ガロ編集部も、青林堂も、ツァイトも、東京も、日本も、世界も地球も ── よい方向のみを望んでいれば、それはその通りになってゆくと（もっとも我々にとっての本当によい方向とは何かを解ってなければならないのだが）。

長井さんありがとう。長井さんの考えや願望が、いろんな人々の方向をよい方に向けていることに、みんなが気づき始めています。

合掌

PHOTO:GENQUI NUMATA

私に勇気をくれる星

津野裕子

いつも見ない新聞で長井さんの写真を見つけてしまった。瞬間「うっ」ときた。お葬式は?と見て、もう終わっているとのこと。
「そうか〜」と脱力を感じた。
　思えば、長井さんに初めてお会いできたのは7年ぐらい前にもなるのでしょうか。
　初めての本を出して頂いた年の夏、材木屋さんの2階の編集部にお邪魔して、なんかすごくドキドキしながら奥の席にいらっしゃった長井さんにあいさつしたのは。（緊張し過ぎて不調法してしまったんじゃなかろうか）
「ガロ編集長」のご本人が目の前に!?
　うわあああってかんじでした。
　そのあと、中華料理を御馳走になったとき、長井さんの老酒を呑んでいる姿を見てバックにグルグル八雲を見てしまった。酒仙?!　ひそかにその時の長井さんをキラキララベルにしてしまいました。
　家に泊めていただいて銀座と浅草を案内して頂いたこともありました。（すごいもったいない……）
　こんな田舎の一発ドーンと笑わせる芸もない小娘の相手をさせてしまって悪かったなあーと恐縮も行くとこまで行ったって感じです。大変な迷惑……しかもまたいろいろ御馳走になってしまっているという。
　なかでも浅草に連れて行ってもらった時の〝神谷バー〟の煮物と電気ブランがおいしくって、今だに飲み屋に行くとつい電気ブランを頼んでしまうのです。長井さんの暖かい心遣いが忘れられず。
「長井さんと浅草ですってえ?!」間違いなく私の人生の最高潮の思い出の一つであります。
　長井さんがもうこの世界のどこにも居ないなんて実感がわきません。キラキラベルを星形にくり抜いてスターが星になっただなんて?わからない……
　と、思っていたのですが、この原稿を書くにあたって白取さんに「今月号のガロ見てくださいね。」って言われたけど実は、なんだか見る勇気がなかった私は本の袋怖くて開いてなかったんですが（ごめんなさい）本屋でガロの表紙を見てしまって、とうとう長井さんが亡くなってしまったとゆうことが解ってしまいました。それまで、もしかしたら偲ぶ会にもいらっしゃるんじゃないかとどこかでバカにも思っていたような私。
　昔の、笑ってらっしゃった写真。あの表紙には困ってしまいました。
　雪道、どうにも、いつもよりずっと首がうなだれて帰りました。
　年末から年始にかけて神主さんをしていた叔父さんが亡くなり（神主だって死ぬんですね……）そのせいもあって母が一月程寝込み、友達のお母さんが亡くなって、これまた違う友達のお父さんが入院するわで、死が死を呼ぶような禍々しさに恐怖していた私には、もうこれ以上は……と受け入れられなかったのかもしれません。
　長井さんの「漫画続けなさいよ」という言葉は、〝私描いててもいいんですか〟と、小さいけど強い光をはなって今だに漫画に限らず私に勇気をくれる星なのです。
　そうゆうエネルギーをもってられた方だから、違う次元に行ってしまわれてもやっぱりずっと、いろいろな人に星をまいてらっしゃるような気がするのです。

illustration: Yuko Tsuno

長井さんに会えて良かった

鳩山郁子

朝、知り合いの編集者から長井さんの訃報が新聞に載っていた事を伝えられた。

ぼんやりと、呑み込めない頭で私は手紙の箱の中から、昨年長井さんから届いた暑中見舞の葉書を取り出していた。

〝～ひまな時、ぜひ遊びに来て下さい、電話をかけてね。〟裏を見ると、他の部分の勢いのいいボールペン字とは違う、そこだけ落ち着いて書いた様な字で電話番号が付け足してあった。この時、電話をしてお会いすれば良かったと悔やまれて仕様が無かった。長井さんのお宅と私の住んでいる所は自転車でものの十分の距離である。長井さんはいつしか阿佐ヶ谷の空気そのものの様な、いない事が考えられない様な存在になっていた。電車で通り掛かる度に〝阿佐ヶ谷には長井さんがいる。お元気かな〟と心の中で唱えるだけで安心の様な、それだけで良い様な気がしていた。一人住まいを始めてしばらく経った頃、青林堂に立ち寄った帰りに長井さんが食事に誘って下さった事がある。長井さんと並んで歩くのは初めてなので、自分の背がとてつもなく高くなった様な気がした。新宿のテーブル席で食べる様な懐石料理屋で、あでやかなお弁当を頂いた。長井さんはくちこを肴に、日本酒を美味しそうに召し上がっていらした。

「アンタ、この頃線が荒いねぇ、オトコでもできたの」以来会う度にオトコ、できたのと聞いてくる長井さんであったが、それはつまり、私の様な者は東京に出てくるよりも家で地道に漫画を描いている方が本当はいいのに、という事なのであった。仲居さんが帰り際にお孫さんですか、と尋ねていたが、成程長井さんにしてみれば孫の女の子が東京に出て来た様なものなのだろう。長井さんはそんな〝孫の女の子が描いた〟様なマンガも見て下さっていた。

長井さんも人間なので、漫画の好みなどおありだったろうと思うのだが、「アンタ、だんだん良くなってきたね」とほめられると、ああ描いてきてよかったと思えた。具体的にどうこうという事は仰有らず、ただ長く描ける作家になりなさいよとだけ仰有られた。

代表取締役を退任されて少し経った頃、長井さん御夫婦が白浜のマンションに移られると聞き、近所に居る内にと思い、阿佐ヶ谷で食事を御一緒した。パン屋の二階にあるフランス料理屋で、長井さんはワインとステーキを少しずつ召し上がった。Cobuでコーヒーを頂き、花屋の前を通り掛かった時、「買ってあげるよ」と、この時沢山のブルーレースの花を頂いた。長井さんのお宅へ伺う途中のマンションのエレベーターの中での事である。扉が閉まって何秒か後、実にさり気なく、長井さんがスッと私の手を握ってきたのだ。あらッと声をあげると、長井さんは「これで最後かもしれないから」と、ニコニコ笑って仰有るのだ。不良老人だなぁ…と思いつつ、ついこちらの方もニコニコしてしまうのだった。その後、長井さんは手術の為に地元の病院に入院された。お見舞いに行くと、術後間もない時で当然の事なのだが、いつもの精悍な長井さんの姿を思うと心が痛んだ。売店に花瓶を買いにエレベーターに乗った時、「最後かもしれないから」と言った長井さんの言葉が始めてリアリティを持って思い返された。

ところがである。その後退院された長井さんの内輪のお祝いにお呼ばれさせて頂いた時には仰天した。肌は艶を帯びて血色も良く、とてもこの間まで入院されていたとは思えない。傍で香田さんは少し心配そうにしていらしたが、御本人は美味しそうにお酒を召し上がっていらっしゃる。そういえば長井さんはこれ迄にも修羅場という修羅場から這い上り、その度に周囲の人達を驚かせ続けてきた方ではないか。正に、その伝説の不死身ぶりを目の当たりにした様な気がした。

長井さんは、やっぱり不死身なのだ。阿佐ヶ谷錦天のお座敷席で、長井さんと奥様、編集部の皆様と打ち揃い、お酒を呑み、私はこの時楽しい気持ちで一杯だった。

もっと真摯なところで長井さんとお付き合いのあった諸先輩方から御覧になれば、実に他愛のない思い出ばかりの羅列である。けれどもその時々の長井さんの言葉は、今では得難い宝石の煌めきの様に心に残っている。何よりも、長井さんに会えて、本当に良かった。追悼号の、香田明子さんの手による文章は、長井さんがいかに静かにその死の時を迎えられたかを伝えており、本当はもっと長生きして欲しかったのだけれど、そう思う事すらも傲慢であるような気持にさせられる、そんな不思議な力があった。

今やっと、心から御冥福をお祈りする事が出来る様な気がします。

長井さん、さようなら。そして、本当に、ありがとうございました。

歴史と話した

吉田戦車

長井さんには一度だけお目にかかったことがある。新宿の「陶玄房」でやったガロの新年会に、内田春菊さんに連れていってもらった時だ。

座敷の奥のほうに、ベテラン作家の方達なんかといて、編集さんに連れられてあいさつにいったら、わざわざ立ってこちらに来て、あいさつをされた。「ガロをよろしくお願いします」というようなことをおっしゃられたように記憶している。「ガロを」ってのはなかったかな。どっちにしろ、わざわざ立って来られたのには恐縮した。

過去の人あつかいするつもりはなかったけれども、『歴史と話した』と思った。その後、お会いする機会はなかった。もう一度ぐらい漫画のお話とか、聞きたかった気もする。

飲み屋のうす暗い座敷にいる長井さんは、モンゴルの遊牧民のチョーローのようでかっこよかった。

小さくて大きい長井さん

友沢ミミヨ

その昔、長井さんは私にとって〝存在は知ってても見たことがない〟お方でした。

上野駅にいるジャイアントパンダ（全身4～5ｍ）の置きものを「これ実物大やで」というて信じた友人がいたように、長井さんに関しては、人の噂だけで翁像を構築しておったわけです。特に、長井さんがいるはずなのにいない編集部にいった帰り道など、「本当にいるのか」と問われると、ＵＦＯのように未確認な「？」になってしまうのでありました。

『ガロ』という長井さんの偉業を前にして、そんな失礼な妄想をしていたのですが、四年前のパーティではじめてお見かけして「？」が「！」になりました。（遠くにいらっしゃったので、とても小さく見えましたが）

次のパーティの時、思いきってご挨拶したら（これが最初で最後になるのですが）にっこり笑って「頑張って描いて下さいね」と仰って下さいました。その時のあったかい感じと、長井さんの大きさ（近くでお目にかかってもとても小さい方でしたが）に、「！」が「!!」になり、長年の『ガロ』への想いが、そのお言葉で成就したような気がしました。

何度も何度も反芻しております。

有り難うございました。

長ぐつとタバコと1万円札

石川次郎

漫画家の大家の皆様が語られるほど、ボクは長井さんと深く親しい間柄にあったとは言えませんが、それでも長井さんにガロデビューさせて頂き、親切にして下さったこの10年の間に、ボクのなかにも長井さんとの思い出がいくつかあります。

デビューしてからの3年程は、作品が出来上がると青林堂さんに電話をかけ「いついつに伺いたいのですが…」と長井さんに伝えると「じゃあ11時頃にきてよ」と言われました。

クソ真面目だったので、11時ピッタリに、それもワザワザ腕時計を見計らいながら神保町の会社のドアをトントンとノックしていました。

ドアを開け、ペコリとお辞儀をして「原稿を持ってまいりました」と言うと、奥の方にいらっしゃる長井さんだけが「ああどうぞ」と言って下さり側にゆくのですが、社員の方々は、ボクのことなど目もくれず、一生懸命働いておられるのです。

今でも青林堂さんの社員の方々は、原稿を持っていっても、ボクなんぞにはちっとも目もくれず、モクモクと馬車馬の如く働いていらっしゃる、かなり不思議な会社だと思いますが、これも長井さんんがいらっしゃった頃の名残りのような気もして、ちいっとも寂しくなんてありませんよ、ボク。

長井さんに原稿を見て頂いている間、ジッと息を殺し「ああ、なんと言われるだろう」とドキドキしながら長井さんの足元を見ると、大方黒い長ぐつを履いていらっしゃる。外が晴れている時でも履いていらっしゃる時がある。スーツに長ぐつ…。考えてしまうけれどカッコイイ。長井さんだからカッコイイ。不思議だなとは思ったけれど、後々他の方に聞くと「朝、天気予報で雨が降ると聞くと、出掛けに降っていなくとも長ぐつを履いてくる」とのことで、豪快なお人柄のなかにも用意周到なところがあるのだなあ…と思ったりしました。

ある時、いつものように原稿を見終えて頂き、ボクが「タバコいっぷくしてもいいですか?」と聞くと、長井さんはガラガラと側の窓を開け、あのしゃがれ声でもって「ああどうぞ、100ぷくでもどうぞ」と元気に言われました。「あっ、イヤ、100ぷくはできませんけれども…」とペコペコしてしまいました。

豪快なお人柄のなかにも、ユーモアがおありになるのだなあ…と、ニンマリしました。

たまに午後の1時頃に行った時など、帰り際に「あんたメシ食ったの?」と聞かれ「まだです」と答えると「山ノ井くん（当時ボクの担当編集員）これで石川くんといっしょにメシ食ってきなよ」と言い、いくらかのお金を山ノ井さんに渡し、2人で近くのメシ屋へ行き、おいしいものを御馳走して頂きました。

下北沢に引っ越したばかりの頃、空き巣に入られ14万円取られた次の日に原稿を持っていったので、長井さんにそのことを話すと「あんたナニやってんだよ…この生き馬の目を抜く東京で、ドアのカギあけっぱなしで出掛けちゃダメだよ」と言いながら、ポッポをもそもそして「あんたカネないんだろ」と、ピーンとピンピンの1万円札を「これあげるよ」と、ボクの手に握らせて下さったので「いえいえ…そんなつもりで言ったのではないのです…」と言ったけれど、時すでに遅く、しっかりとサラピンの1万円札がボクの手の上にあり、長井さんの手は読みかけの書物のところにもどっていたのでありました。

長井さんが、この世から去ってしまわれ「あんたガンバンなさいよ」の声も、もう聞くことができませんが、心の中で「あんたガンバンなさいよ」の声は、おそらく何年たっても消えることはないだろうと、今も鳴かず飛ばずながらも漫画を描きつづけているボクは思うのです。

「長井さん、どうもいろいろとありがとうございました」